

漢代辟雍小論

著者	杉本 重雄
雑誌名	漢文學會々報
巻	4
ページ	118-133
発行年	1936-03-15
URL	http://doi.org/10.15068/00146750

漢代辟雍小論

杉 本 重 雄

は し が き

前漢の武帝は國家統治の重責を遂行する必要上から有能なる人物を養成せんとし、五經博士及び博士弟子員を設けたが、博士弟子員設置の原動力と爲りたる公孫弘の奏請文の頭初には、民衆教育の手段として禮樂の重要なことを述べ、殊に禮を興すを天下の先と爲すとし

蓋聞。導民以禮。風之以樂。婚姻者居室之大倫也、今禮廢樂散。朕甚愍焉。故詳延天下方聞之士。

咸登諸朝。其令禮官勸學講義。洽聞舉遺。興禮以爲天下先。（史記、前漢書、儒林傳序）

と言つて居るが、此の精神的陶冶の職能を有する禮樂の施設に關しては、樂府を置き李延年を協律都尉に任じ、樂の研究は行はれたが、禮に就いては何等の獨立的攻究機關は新設さるゝに至らなかつた。

其の後、前漢末王莽の時に辟雍を立て禮樂を以て天下を教化したが、間もなく爭亂に遭ひて破壊せられ、後漢に及びて光武帝再び辟雍を建設し、明帝は此處に於いて鄉飲酒禮、鄉射禮及び養老禮等を行

ひ、天下に禮義の尊崇すべきことを示し、更に同帝は大學を廢して辟雍のみを以て教化の根源と爲さんとする程に重要視し、大學廢止は遂に實行されなかつたが、大學を經書の義理を授くる知的教育所とすれば、辟雍は禮の内容を教へる道德的的精神的教育所としての特質を有し、漢代教育史上此の二者は不可離の關係を有したのである。

一、辟雍の變遷過程

漢代に於ける辟雍の成立と其の變遷過程を歴史的に見れば、前漢の高祖天下を統一したが國內の整備工作に忙殺せられ、文化的設備を爲す遑なく専ら武力主義に據つて居たが、武帝に至るや武を以て天下を統治する方法は一般落を告げ、人心安定の爲に文事に意を用ひ大學を立つることなどがあつたが、辟雍に關しては前漢書、兒寬傳に

間者聖統廢絕。陛下發憤。合指天地。祖立明堂辟雍。宗祀泰山。

と言ひ、又同、河間獻王傳には武帝時。獻王來朝。獻雅樂。對三雍宮。とあり、後漢の應劭は三雍宮を注して辟雍、明堂、靈臺なりとし、之等より推測する時には武帝の時に辟雍が存在して居つた如くに考へられ、三輔黃圖には河間獻王傳の文を引用し

漢辟雍在長安西北七里。漢書河間獻王來朝。獻雅樂。武帝對之三辟宮。卽此。

と述べ、後世三雍宮を辟雍、明堂、靈臺とする應劭の説に従ふ者が多く、黃以周も

漢初合明堂璧雍靈臺。謂之三離。亦謂之三宮。(禮書通故、明堂)

と言つて居るが、馬端臨は三雍宮と辟雍との關係に就き

辟雍王莽時方立之。武帝置博士弟子員。不過令其授學而擇其通藝上第者。擢用之。未嘗築宮以居之也。然考兒寬所言。與河間獻王對三雍宮之事。則似已立武帝之時何也。蓋古名而同事。……兒寬時爲御史大夫。從祠東封。還登明堂上壽。所言如此。則所指者。疑此明堂耳。意河間獻王所對之地。亦是其處。非養士之辟雍也。(文獻通考、學校考)

と言ひ、辟雍は王莽の時に建立せられたるに、武帝の時に既に設けられたる如く前漢書に見ゆるのを疑問とし、兒寬傳に明堂、辟雍とあるのを明堂のみではなからうかとし、獻王の對せし所を泰山の明堂とし、辟雍ではないとの意見を持ち應劭説に反對して居る。

武帝の時に於ける辟雍の存否には斯くの如く二説あるが、史記、封禪書及び前漢書、武帝祀、禮樂志、郊祀志には、武帝の卽位の初に長安城南に明堂を立てんこと 企計したが失敗に終つたことを記し

上(武帝)鄉儒術。招賢良。趙綰。王臧等。以文學爲公卿。欲議古立明堂城南。以朝諸侯。草巡狩封禪。改歷服色事。未就。竇太后不好儒術。使人微伺趙綰等姦利事。按綰臧。綰臧自殺。諸所興爲皆廢。

(前漢書、郊祀志上)

と言ひ、其の後に明堂は建設されたが

元封二年。秋作明堂于泰山下。（前漢書、武帝紀）

とある如く長安城でなく泰山の下であり、若し三雍宮は明堂、辟雍、靈臺を包括せる名稱なりとすれば、辟雍も泰山の下に在ることになり、此の事は後世辟雍は天子の居住する近郊に置かれたる常例に反するし、更に前漢書、武帝紀には明堂に祭祀した例が多數に存するが、辟雍に就いては一言も記述して居ら無い。加ふるに成帝の時に劉向は辟雍を興さんことを上奏し、帝は公卿に其の議を計らしむることなどあつたが、向の病卒後は丞相、大司空等此の遺志を繼いで辟雍の造立を奏請したが、帝の崩御に遭ひて實現されなかつたこともある。（前漢書禮樂志）

斯かる諸點より武帝の時の三雍宮は明堂、辟雍、靈臺であるとする應劭の説には従ひ難い。若し武帝の時に辟雍がありとすれば、成帝に劉向は之が建設を奏する必要も無く、恐らく應劭は後漢時代に於いて

中元元年。初建三雍。（後漢書、儒林傳序）

永平二年。三雍初成。（同、桓榮傳）

とある如く、三雍は明堂、辟雍、靈臺の統一名稱であつたのを、前漢書、河間獻王傳に適用して注したものであらう。然して劉寶楠は別の立場より大學と共に辟雍も武帝の時より置かれたるものである

とし

案太學小學及辟雍。皆武帝立。……似西漢未有辟雍太學者。年代寢遠。辟雍庠序。中更復廢。故劉向復爲請立。非必成帝前。無辟雍太學也。（愈風錄）

と言つてゐるが、若し武帝の時より辟雍は存してゐたが、中途より廢せられたので劉向が再興せんことを上奏したのであるとすれば、其の廢するに至つた歴史的敘述がなければならぬのに、前漢書、禮樂志には韃爲郡にて古磬十六枚を得たから禮樂を陳ぜん爲に辟雍を立つべし、との理由になつて居り、武帝と何等相關々係を有してゐなく、劉寶楠の説も肯定することは出來ない。

要するに武帝の時には

（武帝）時大儒公孫弘、董仲舒等。皆以爲音中正雅立之大樂。春秋鄉射。作於學官。（前漢書、禮儀志、宋畢上書）

とある如く、大學の教授者の中には樂や鄉射の如き禮に通じたる人も居り、之等の人が學生に經書を教へ禮儀も授けたるを以て、特別に辟雍を設け禮儀を專問に研究させることを要しなかつたので設立されなかつたが、武帝以後大學は經書の義理の研究のみを行ひ禮儀を省みなくなつたので、劉向の奏請と爲つたのであると思ふ。

平帝の時に至りて王莽は明堂、辟雍を立てんことを奏し

元始四年。安漢公奏立明堂辟雍。（前漢書、平帝紀、王莽傳上）

とあり、其の翌年に明堂に於いて祫祭を行つて居り

元始五年春正月。祫祭明堂。(同上)

と言つて居るから、明堂の竣成せることは分り、更に前漢書、蕭望之傳に

元始中。作明堂辟雍。大朝諸侯。

とあり、又

及王莽爲宰衡。欲燿衆庶。遂興辟雍。因以纂。(前漢書、禮樂志)

とある記事等に依つて辟雍も落成したことを知るが、辟雍の位置は

衆兵發掘莽妻子祖冢。燒其棺槨及九廟明堂辟雍。火照域中。(前漢書、王莽傳下)

と言つて居る文に據れば、明堂と共に長安城の近郊に在つたことが想像せられる。

後漢の光武帝漢室を再興するや、十四經博士を置き大學を設くるなど文化方面に力を入れたが、之等に引續き明堂、靈臺、辟雍等の建築に着し

是歲(中元元年)初起明堂靈臺辟雍及北郊兆域。(後漢書、光武帝紀下)

と言つて居るが、光武帝の時には完成されずして明帝の時代に竣功し、後漢書、翟酺傳には明帝時、辟雍始成。と記され、同、明帝紀に據れば

永平二年春正月辛未。宗祀光武皇帝於明堂。：禮畢。登靈臺。：三月。臨辟雍。

とあるから、永平二年三月以前に三者が完成したのである。

辟雍の位地は後漢にては何處に在つたかと言ふことは明確なる記録なきも、後漢の應劭は漢官儀下に辟雍去明堂三百歩。と言ひ、明堂は後漢には前漢の武帝の作りしものと雒陽にあるものとありて

章帝即位。元和二年二月。上東巡狩。：壬申。宗祀五帝於孝武所作汶上明堂。光武帝配。如雒陽明

堂祀。(後漢書、
祭祀志)

と言つて居るが、又王莽が長安に明堂、辟雍を立てし例より推して、後漢の辟雍は雒陽にあり明堂と接近して立てられて居つたものであらう。

辟雍の構造は前漢の時のことは不明であるが、後漢に於けるものとしては白虎通に

辟者璧也。象璧圓以法天也。雍者壅之以水。象教化流行也。

と説明して居り、應劭も辟雍四門外有水。門外皆有橋。と述べてゐる程度のことしか分らない。

辟雍の意義に就いては劉向は五禮通義の中にて

天子立辟雍者何。所以行禮樂。宣化教道天下之人。使爲士君子。養三老五更。與諸侯行禮之處也。

と言ひ、德育を司るを主目的とし、徳を養ふには禮樂を以てし、天下の人を士君子たらしめる理想を有して居るのを特色とするが、白虎通にも之と略、同様な記述を爲し

天子立辟雍何。辟雍以行禮樂。宣德化也。辟者璧也。象璧圓以法天也。雍者壅之以水、象教化流行

也。辟之言積也。積天下之道德。雍之爲言壅也。天下之儀則。故謂之辟雍也。

とあり、辟雍は前後漢を通じて禮樂を以て道德教育を施す所と爲したのであるが、禮樂の中何れに重點を置いたかと言へば、後漢書、張純傳に

張純以聖王之建辟雍。所以崇尊禮儀。

とあり、禮が尊崇せられたことを知る。

辟雍は其の後益、重要視され、明帝の時には大學を廢して辟雍を以て之に代らしめんとし、太尉趙熹の諫言にて實行さるゝに至らなかつたが、後漢書、翟酺傳には

明帝時。辟雍始成。欲毀太學。太尉趙熹以爲太學辟雍。皆宜兼存。故並傳至今。

と記してゐる。明帝は辟雍にて大射禮、養老禮を畢へるや、經書を自ら講じて臣下に説き

(明帝)每大射養老禮畢。帝輒引桓榮及弟子升堂。執經自爲下説。(後漢書、桓榮傳、)

とある程にして、大學の機能を奪取したかの如くに見えたが、同帝以後安帝の時に至りて大學と共に衰退し、順帝は大學は再興したが辟雍は再建しなかつたものらしく

頃者(辟雍太學)頽廢。至園採芻牧之處。宜便修繕。誘進後學。順帝從之。翟酺免後起太學。(後漢書、翟酺傳、)
とあり、辟雍は其の儘に放任せられたものであらう。

二、鄉飲酒禮及び鄉射禮

辟雍に於ける職能を發揮せんが爲に、郷飲酒禮、郷射禮及び養老禮の三禮を行ひて德化教育を爲したが、前節にて述べし如く、武帝時代は大學にて郷射禮を行ひ、郷射の禮を行ふ場合には飲酒するに依りて、勿論飲酒禮も同時に實施されたものであると考へられる故に、大學のみにて知育、德育の鍊磨を爲し得たるを以て辟雍を設くる必要を認めなかつたが、其の後大學は専ら經書の研究に赴き、禮を通して人格を修要すべき方面を閑卻するに至つたので、成帝の時には

成帝鴻嘉二年三月。博士行飲酒禮。(前漢書、平帝紀)

鴻嘉二年三月、博士行大射禮。(前漢書、五行志、中ノ下)

とある如く、博士に命じ行禮せしめてゐる。然して平帝紀と五行志との間に記事の相違があるのは、恐らく武帝當時は郷射禮及び郷飲酒禮は同時に施行されたのであり、何れか一方を書して他を代表し此の遺風が成帝の時にも殘存して居つたので、平帝紀は郷飲酒禮とし、五行志は大射禮とし、(前後漢書は大射と郷射とを同一に扱つてゐる)記載様式は異つてゐるが内容は同一のことを敘述してゐるのであらうと思ふ。

前漢の末に王莽は辟雍を建設して禮儀を尊崇したが、後漢光武帝も郷飲酒禮を行つたことが見え、後漢書、伏湛傳に

伏湛雖在倉卒。造次必於文德。以爲禮樂政化之首。顛沛猶不可違。是歲(建武三年)奏行郷飲酒禮。

逐施行之。

とあるが、建武三年は辟雍の建立されざる以前であつた故に、此の禮は他の適當な所にて爲されたのであらう。明帝に至りては辟雍も落成し、大射禮、養老禮は盛大に行はれ

永平二年春三月。臨辟雍。初行大射禮。…冬十月壬子。幸辟雍。初行養老禮。(後漢書、明帝紀)
とあり、後漢書、禮儀志には

明帝永平二年三月。上始帥羣臣。躬養三老五更于辟雍。行大射之禮。郡縣道行鄉飲酒于學校。
と言ひ、鄉飲酒禮のみは郡縣道の學校にて行ひ、三月に養老禮、大射禮を爲した如く見ゆるが、明帝紀には三月に大射禮、十日に養老禮と行つたと記して居り、白虎通には

所以十月行鄉飲酒之禮何。

とあり、其の他に

永元十四年三月戊辰。臨辟雍。鄉射。(後漢書、和帝紀)

禮嘉元年春三月庚寅。順帝臨辟雍。鄉射。(後漢書、順帝紀)

陽嘉二年冬十月庚午。行禮辟雍。(同上)

今郡國十月。行此飲酒禮。(儀禮注疏、卿飲酒之禮注)

今郡國行此禮(鄉射禮)以季春。(儀禮注疏、鄉射之禮注)

とある例より推せば、後漢は三月に郷射禮を行ひ、十月には養老禮と郷飲酒禮とが同時に行はれたものと思はれ、禮儀志の文は簡略記法を用いたのであらう。前漢には郷射禮と郷飲酒禮が同時に施行されたので、何れか一方を記して他をも代表する程に密接な關係を持つてゐたのであるが、後漢に至りて郷射は禮を習ふと言ふものゝ、武の要素が加味されて居る故に二者を分割し、平和的な郷飲酒禮と養老禮とを同時に行ひ、郷射禮と分けたものと考へられる。然し武は大切なもの故に秋九月にも郷射禮を行つたものらしく、應劭は

車駕臨辟雍。從北門入。三月。九月。皆于中行郷射禮。(漢官儀下)

春三月。秋九月。習郷射禮。(後漢書、儒林傳序注引、漢官儀)

と言つて居る。

郷飲酒禮と郷射禮との意義は何れも禮儀を習ひ、徳性の涵養を目的とするを以て此の點に相關性を有するが、鄭玄は二者の關係を述べ、郷射禮を説明して雖先飲酒。主於射也。(儀禮注疏、郷射禮、無介注)と言ひ、射を主と爲すも、先に飲酒すると注して居る。

白虎通には郷射禮を

射義非一也。夫射者執弓堅固。心平體正。然後中也。二人爭勝。衆以德養也。勝負俱降。以崇禮讓。故可以選。

と述べ、郷飲酒禮は

所以十月行郷飲酒之禮何。所以復尊卑長幼之義。春夏事急。浚井次牆。至有子使父。兄弟使兄。故以事間暇。複長幼之序也。

と説明してゐるが、全く平和の方法に依りて徳を養ふのであり、養老禮の本質は同書に

王者父事三老。兄事五更何。欲陳孝弟之德。以示天下也。故雖天子必有尊也。言有父也。必有先也。言有兄也。

と記して居る如く、目的は勿論手段迄も平和的なを以て、後漢には郷飲酒禮と養禮禮とが同時に辟雍に行はれることに爲つたのであらう。

辟雍に於ける之等の儀式は太常の管轄に屬し、重大なる作法なる故に太常目ら之に當りて其の禮儀を天子に上奏し、後漢書、百官志には

太常卿一人。中二千石。本注曰。掌禮儀祭祀。每祭祀。先奏其禮儀。及行事。常贊天子。…大射。養老。大喪。皆奏其禮儀。

と言つて居る。而して祭祀の模様は如何であつたか分明することは出來ぬが、服虔、應劭は

漢家郡縣郷射祭祀。祀皆假士禮而行之。樂縣笙磬簫俎。皆如士制。（後漢書、禮儀志上、明帝永平二年三月注）

と述べて居るから、士禮を現存する儀禮なりとすれば、其の有様を略、知ることが出来る。

三、養老禮

辟雍にて舉行せられたる禮には、郷飲酒禮及び郷射禮の他に養老禮が存する。辟雍に於ける養老禮とは天子が三老に父事し、五更に兄事して、以て民に孝悌の道を重んずべきことを示すの目的を有するのであるが、三老の名稱は早くも高祖の時に存し

漢高祖二年舉民年五十以上。有修行。能帥衆爲善。置以爲三老。郷一人。擇郷三老一人。爲縣三老。興縣令丞尉。以事相教。復勿繇戍。以十月賜酒肉。（前漢書、高帝紀上）

と言つて居るが、後世の養老禮の三老とは意義を異にし、縣令・丞尉と共に民衆に教へ、其の報酬として課役なく酒肉を賜はつて居る准投人的存在であり、柳詒徵は當時の三老を

夫三老出於選舉。而其權可縣令丞尉。以事相教。是固無異於今之縣市郷自治職員矣。（中國文化史上、秦之統一）

と云ひ、現今の自治員に相當するとして居るが正に適語である。三老の斯くの如き意味の用法は文帝、武帝以後も使用されたが、王莽に至つて初めて養老禮は盛大に行にれ、三老も今迄の意義の他に養老禮に於けるものをも指すに至つた。然し王莽の時には

居攝元年正月。莽祀上帝於南郊。迎春於東郊。行大射禮于明堂。養三老五更。成禮而去。（前漢書、王莽傳上）

とある如く、明堂にて大射禮、養老禮を行つたかに見ゆるが、王莽の居攝元年には既に辟雍が完成されてゐたのであるから、辟雍の誤りではないかと思ふ。

後漢に入りて光武帝辟雍を起し、明帝之を完成し、永平二年に辟雍に行幸されて養老禮を行ひ、漢代の養老禮は明帝に至りて初めて儀具はれりと言ふことが出来る。以後養老禮は次第に衰微したが、蔡邕は靈帝の熹平年間に七事の必行すべき項目を上奏せる中に

養老辟雍。示人禮化。皆帝者之大業。祖宗所祇奉也。(後漢書、蔡邕傳下)

と言ひ、他の二禮を記してなき所より見れば、養老禮は如何に重要視されてゐたかを心得するも、又此の文より全然行はれなく爲つてゐたことも分る。

養老禮の意義も教育上重大なるものにして、白虎通には

王者父事三老、兄事五更者何。欲陳孝弟之德。以示天下也。故雖天子必有尊也。言有父也。必有先也。言有兄也。天子臨辟雍。親袒割牲。尊三老。父象也。…兄事五更。寵接禮交。加客謙敬。順貌也。…不正言父兄。言老更者。老者壽考也。欲言所令者多也。更者更所也。所更歷者衆也。卽如是。不但言老。言三何。欲其明於天地人之道而老也。五更者欲其明於五行之道而更事也。

と言ひ、天子すら父兄に仕へて孝弟の道を守る故に、臣下は猶更に之を實行すべきであるとの無言の教訓を示し、此處に教育的價值が存する。三老五更の三・五の字の説明を白虎通は天地人と五行思想とより見てゐるが、蔡邕も略々之と同議にして

天子父事三老者。適成于天地人也。兄事五更者。訓于五品也。更者長也。更相代至五也。能以善道

改更己也。又三老老謂久也舊也壽也と。(獨斷)

言つて居り、鄭玄は三辰五星より説き

天子以父兄養之。示天下之孝悌也。名以三五者。取象三辰五星。(禮記、文王世子、遂設三老五更注)

と言ひ、孔疏は之を解して

三星日月星。五星謂東方歷星。南方熒星。西方太白。北方辰星。中央鎮星。(同上疏)

と述べてゐるが、白虎通の説が至當であらう。

三老は天地人、五更は五行の道より説明して居るから、三老は三人、五更は五人の員數を具へてゐるかとの疑問を持つが、白虎通は各一人なることを述べ

三老五更幾人乎。曰各一人。曰何以知之。既以父事一而已。不宜有三。

と言ひ、五更のことは記してないが、三老の説明より推量されるものとして省略したのかも知れない。鄭玄も各一人とし

三老五更各一人也。(禮記、文王世子、遂設三老五更注)

と言つて居り、後漢書、禮儀志にも

養三五更之儀。先吉日司徒上太傅若講師。故三公人名用其德行年耆高者。一人爲老。次一人爲更也。と言ひ、上掲の諸例より三老、五更も各一人であつたことが判明するのである。

養老禮の儀式は今日文獻に残るもの多く、或程度は知得されるが、後漢書、明帝紀には

永平二年冬十月壬子。幸辟雍。初行養老禮。詔曰。：今月元日。復踐辟雍。尊事三老。兄事五更。

安車輶輪。供綏執授。侯王設醬。公卿饌珍。朕親祖割。執爵而醕。祝哽在前。祝噎在後。升歌鹿鳴。下管新宮。八佾具修。萬舞於庭。

と言つて居り、安車輶輪を以て迎へ帝は之を門屏に拜し、帝自ら祖割し王侯も夫々奉行し、樂を具へ舞を爲すなど威儀整然たるものあり、此の式の終了の翌日、三老は宮闕に至りて昨日の厚遇を謝し

天子父事三老。兄事五更。天子獨拜於屏。明日三老詣闕謝。(漢舊儀補遺)

と言ひ、蔡邕の獨斷にも同様な記事があるが、唐の章懷太子は明帝紀に更に詳細に注し

皆(三老五更)齋于太學講堂。其日乘輿。先到辟雍。禮畢。殿座于東廂。遣使者安車。迎三老五更。

天子迎于門屏。交拜導自阼階。三老自賓階升東面。三公設几杖。九卿正履。天子親祖割俎。執醬而饋。執爵而醕。五更南面。三公進供。禮亦如之。明日皆詣闕謝以其於己大隆也。

と言つてゐる。

以上述べし如く辟雍は行禮の所であるが、單に禮式を習得するのではなく、飽く迄禮に依つて徳を養ふを目的とし、此の點に教育的意義を發見するものである。